

## ハイダ語の類別接頭辞と名詞類別

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009979">https://doi.org/10.14945/00009979</a>

# ハイダ語の類別接頭辞と名詞類別

堀 博文

## 1. 序

ハイダ語には、動詞に付加される付属形式のひとつとして類別接頭辞と称される要素がある<sup>1</sup>。その典型的な機能は、自動詞節であればその主語、他動詞節であればその目的語となる名詞句がどのような意味範疇に属するのかを示すことである。名詞を何らかの基準によって分類し、それらがどの範疇に属するかを示すという点で、一般的に類別辞classifierといわれるものの一種である<sup>2</sup>。

本稿は、ハイダ語の類別接頭辞の概要について述べた後、それらの機能が類別classificationだけに留まらず、談話においてもある一定の機能を果たすことを指摘し、更に、ハイダ語の類別接頭辞の考察を通じて名詞類別の本質的な特徴を探ることを目的とする。

## 2. ハイダ語の類別接頭辞の一般的特徴

一般的に類別辞といわれるものには、名詞に付く名詞類別辞noun classifier、数詞に付く助数詞numeral classifier、動詞に付く動詞類別辞verbal classifierなどがあるが、ハイダ語の類別接頭辞は、動詞語根に付加されることから、それ

<sup>1</sup> ハイダ語Haidaは、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸のハイダ・グワーイHaida Gwaii (旧名:クィーン・シャーロット諸島)とアメリカ合衆国アラスカ州の南東部で話される系統不明の孤立言語である。ハイダ語の類別接頭辞については堀(2001a)でも扱ったが、その後の調査の進展において、旧稿で十分扱い得なかった点を敷衍したり、旧稿の分析・解釈上の誤りを正したりする必要が生じたために、本稿を新たに草することにした。

<sup>2</sup> 勿論、類別辞は、言語によっては付属形式の場合もあれば、自由形式(付属語)の場合もあり、また、数詞につくものや名詞につくものなどいろいろなタイプがあり得る(類別辞の種類については、例えば、Aikhenvald 2000などを参照)。尚、本稿では、そのような類別の機能を有する形態素一般を「類別辞」、対して、ハイダ語のそれをいう場合は「類別接頭辞」と称することにする。

らの中でも動詞類別辞の一種であるといえる。動詞類別辞は、一般的な特徴として、自動詞節の主語あるいは他動詞節の目的語となる名詞句が如何なる意味範疇に属するかを示す機能を有する (Aikhenvald 2000: 150などを参照)。次の例にみるように、その特徴はハイダ語の類別接頭辞にも当て嵌まる<sup>3</sup>。

- (1) c'aanəwaay ʔgi-gaaw-tl'əχa-gən.  
 the.log CL-LIE-to.destination-PAST  
 'The log drifted ashore.'
- (2) c'aanəwaay=?əsəŋ t'aləŋ kid-ʔgi-daal-sga-gən.  
 the.log=too we by.poking-CL-MOVE.ALONG-to centre-PAST  
 'We rolled the log out.'

(1) は *gaaw* を語根とする自動詞節の例であり、それに付加される類別接頭辞 *ʔgi-* は、その節の主語 *c'aanəwaay* 'the log' の物理的特性、すなわち、筒状の大きい物体 (他にも、例えば、トーテムポールなど) であることを表わしている。(2) は動詞語根 *daal* に手段接頭辞 *kid-* が付加されてできた他動詞の例であり、類別接頭辞 *ʔgi-* はその他動詞節の目的語 *c'aanəwaay* 'the log' の意味特徴を示している。これらの例にみるように、ハイダ語の類別接頭辞は、他の言語の動詞類別辞と同様、いわば動詞の方からこれら統語的に関連する名詞句が如何なる範疇に属するものかを表わしており、そのスコープは動詞内部ではなく節にあるといえる (Aikhenvald 2000: 270などを参照)。

しかし、ハイダ語の類別接頭辞はすべての動詞語根に付加されるわけではない。その点でみれば、いわゆる文法性 *gender* に代表されるような名詞クラス *noun class* とは異なる (Dixon 1982, 1986などを参照)。つまり、名詞類別の標示は義務的な文法範疇の一つではなく、類別接頭辞の現われは、形態法上の条件によって決められている。

<sup>3</sup> 以下にあげるハイダ語例は、典拠が示されていない限り、筆者が得たものである (話者名はこの論文の末尾に示す)。それぞれのハイダ語例の1行目は音素表記、2行目は逐語訳 (グロス。略号の一覧は末尾を参照されたい)、3行目は英訳である。ハイダ語の接辞の付き方は基本的に膠着的であるので、音素表記に接辞の境界を示すことにする (但し、形態音韻規則によって形態素間の境界が明瞭ではない場合は、*xiidən* (PICK.UP[PAST]) のように示す)。

ハイダ語の音素は次の通りである ([ ] 内に国際音声字母による表記を示す) : b, d, g, ɠ, p; (p), t, k, q; t', k', q'; s, ʃ, x, χ, h; j [dʒ], c [tʃ], c'; dl, tl, ul'; m, n, ŋ; w, y, l; 'l [ʔl]; ; i, (e), a, (o), u, ə. 尚、閉鎖音と破擦音の有声字は無声無気音、無声字は無声有気音を表わす。また、/ / は、ゆるやかな声立てを表わす。

ハイダ語では、動詞の核となる動詞語根は、自由語根と拘束語根に分類され、そのそれぞれに様々な接辞が付加されて述語となる動詞が形成される（詳しくはHori 2016を参照）。それらの語根には、その前に様々な接頭辞が付加されるが、自由語根と拘束語根の違いは、(3)に示すように、付加される接頭辞の種類にある（括弧に入れたのは随意的要素である）。

(3) ハイダ語の動詞語根の前に付加される要素<sup>4</sup>

- a. (使役)－(自動詞化)－(手段接頭辞)－自由語根
- b. (使役)－(自動詞化)－手段接頭辞－類別接頭辞－拘束語根

すなわち、自由語根には類別接頭辞が付かず、また、手段接頭辞の付加も随意的である（より正確に言えば、ある程度語彙的に決まっている）のに対し、拘束語根は、手段接頭辞と類別接頭辞の両方あるいはどちらか一方を必ず要する。従って、手段接頭辞と類別接頭辞、拘束語根の組み合わせには次の三通りが考えられる。

(4) ハイダ語の拘束語根、手段接頭辞、類別接頭辞の組み合わせ

- a. 手段接頭辞－拘束語根
- b. 類別接頭辞－拘束語根
- c. 手段接頭辞－類別接頭辞－拘束語根

本稿では、自由語根と拘束語根の区別をするために、上例の(1)(2)の *gaaw* 'LIE,' *daal* 'MOVE ALONG' のように、拘束語根のグロスをスモールキャピタルで示すことにする。

自由語根と拘束語根は、それらの表わす意味内容の面でも異なり、自由語根は比較の意味が捕捉しやすいが、拘束語根は概して意味が曖昧で捉えにくい。むしろより具体的な概念を表わす手段接頭辞や類別接頭辞が付加されることによってその語幹（つまり、語根とそれらの接頭辞）全体の意味が捉えやすくなるという特徴がある（類別接頭辞が具体的な意味を表わすという点については

---

<sup>4</sup> 更に、生産的ではないが、ハイダ語にはいわゆる名詞抱合があり、名詞語根（あるいはそれに類する形式）がそれらの語根の前に付加されることがある。但し、その名詞語根の位置は、動詞語根の種類あるいは付加される接頭辞の種類によって異なる（詳しくはHori 2016: 27-9を参照）。

### 3.2参照<sup>5</sup>。

類別接頭辞が付加される拘束語根を意味特徴によって大まかに分類すれば、次のようになる。

#### (5) 拘束語根の意味分類<sup>6</sup>

- a. 位置: *giŋ* 'float,' *cudi* 'lie,' *tən* 'be (on NP),' *t'as* 'be close,' *xyaaŋ* 'hang down'
- b. 対象の取り扱い・移動: *daal* 'move along,' *cə* 'poke into,' *gi* 'extend,' *xyaaŋ* 'run,' *ga* 'move,' *cuy* 'fall,' *sdlə* 'give,' *sgid* 'come ashore,' *gad* 'move,' *χast'a* 'fall on side,' \**gi* 'make NP go on the water'
- c. 物の状態の変化: *gad* 'break up into classifier-like pieces,' *jigusdlə* 'bundle,' *χəl* 'get a classifier-like hole,' *sgiid* 'open (NP),' *tlə* 'break off'
- d. 音の発生: *daga* 'make a noise,' *ŋgiŋəŋ* 'cry in a classifier-like voice,' *sid* 'make a classifier-like fart,' *χatcu* 'laugh in a classifier-like voice'

ここにあげた分類はもとより網羅的ではなく、また、この意味分類も再考の余地が大いにあるが、自動詞主語あるいは他動詞目的語となる名詞句の指示物の形状などによって形式を違える類別動詞classificatory verbの表わす意味分類と多少重なることがみてとれる。実際、北米のアサバスカ語族にみられる類別動詞は、上の分類でいえば、おそらく(5a)の「位置」や(5b)の「対象の取り扱い・移動」に関するものが多い(Davidson et al. 1963, Croft 1994, Aikhenvald 2000)。しかし、ハイダ語で類別接頭辞をとりうる拘束語根は、類別動詞の有する意味範囲に加え、(5c)の「物の状態の変化」や(5d)の「音の発生」を表わす点において、少なくとも類別動詞よりも意味範囲が広いといえる((5d)の「音の発生」については3.2参照)。

(5)にあげた拘束語根はその一部でしかないが、当然のことながら、それらと同じような意味を表わす自由語根もある。すなわち、同じ行為あるいは出来事を表わすのに、自由語根による方法と拘束語根による方法の両様あるということである。それらの違いについては4節で述べる。

尚、上に述べたように、ハイダ語の類別接頭辞が付加されるのは基本的に動

<sup>5</sup> 従って、拘束語根の中には意味の記述が難しいものがあり、そういったものにはグロスでは単に root と記すことにする。

<sup>6</sup> 意味の記述にあたっては、調査協力者による内省に加え、Enrico (2005) も参考にした。また、\*を付したものは、類別接頭辞に加え、手段接頭辞も要する。

詞であるが、数量詞の語根 *sgu* (~ *sk'u* [自由変異]) はこの類別接頭辞を要求し、[NP CL-*sgu/sk'u*] で「NP丸ごと」「NP一杯」などの意味を表わす<sup>7</sup>。例えば、

- (6) a. *gaal sga-sgu 'lə=sgaytə-gən.*  
 night CL-WHOLE he=cry-PAST  
 'He cried all night.'
- b. *'laa=gi k'ay c'əs-sk'u tə=c'əs-sdlaay ?waa=gi kilxigəŋ-gən.*  
 to.him/her apple CL-WHOLE I=CL-GIVE[NMLZ] to.that need-PAST  
 'I had to give him/her a box of apples.'<sup>8</sup>

(6a) の *sga-* はロープのような一次元で伸縮のある物体を含む類別接頭辞であり、*siŋ* 'day', *tada* 'winter/year' に対しても用いられる。(6a) ではそれが語根 *sgu* 'WHOLE' に付加され、全体でその前の名詞 *gaal* 'night' を修飾している。一方、(6b) では、箱状のものを表わす類別接頭辞 *c'əs-* が語根 *sk'u* に付加され、その前の名詞 *k'ay* 'apple' を修飾し、りんごが箱一杯につまった状態にあることを表わしている。尚、本来「りんご」に対して用いられる類別接頭辞は、小さな球状のものを表わす *skaa-* であるので、動詞語根 *sdlə* 'GIVE' (> *sdl*) (但し、*-aay* [*<-gaay*] によって名詞化されている) には *skaa-* が付加されるべきであるが、この例においては、*c'əs-* を用いることによって、目的語となる「りんご」が箱に入っている状態を示している。これらの例にみるように、類別接頭辞と語根 *sgu* ~ *sk'u* 'WHOLE' の全体で日本語の「丸一晚」の「丸」や「箱一杯」の「一杯」に相当する概念を表わす。

### 3. 類別接頭辞の分類

本節では、ハイダ語の類別接頭辞を形式的な特徴と意味的な特徴から分類することを試みる。

<sup>7</sup> 類別接頭辞は数詞にも付加されるが、数詞は、下の例に示すように、動詞接辞が付加されるので、動詞の一種であると見做す。

*na tay-sdiŋ-gən.* (house CL-be.two-PAST) 'There were two houses.'

<sup>8</sup> ハイダ語の3人称代名詞 (*'laa* ~ *'la* (自立形) と *'lə* (クリティック形)) は、指示対象の性別による区別がないが、談話から抜き出した例文においては、その指示対象の性別によって 'he,' 'she', 更に統語環境によって 'his,' 'her,' 'him' などと英訳を付すことにする。

### 3.1 形式からの分類

ハイダ語の類別接頭辞の多くは1音節である。それらの音節構造を示すと、まず、開音節のものには、次のタイプがある。

#### (7) 類別接頭辞の音節構造：開音節の場合<sup>9</sup>

- a. CV: *ci-, ji-, gi-, ga-, dlə-*
- b. CV<sub>i</sub>V<sub>i</sub>: *kaa-, cuu-, gaa-, jaa-*
- c. CCV: *ʔca-, ʔgi-, sga-, sda-, sq'a-*
- d. CCV<sub>i</sub>V<sub>i</sub>: *skaa-, sq'aa-, k'waa-*

音韻論的にみれば、(7a)と(7b)、また、(7c)と(7d)はそれぞれ「短母音」と「長母音」の違いにみえるが、(7a)と(7c)は音声的には低声調を担った長母音で実現するので(例えば、*gi-* [gi:]、*ga-* [gá:]<sup>10</sup>)、高声調を担う(7b)と(7d)(例えば、*kaa-* [ká:]、*gaa-* [gá:])とは母音の長さではなく声調が異なる。(7a)や(7c)のように/V/タイプの音節を長母音でかつ低声調(すなわち、[V:])にするという音韻規則は、同じタイプの音節をもつ自由語根には必ず適用される(例：/gu/ → [gù:] ‘burn’ など)が、拘束語根には適用されず、/V/タイプの音節の母音は長母音として実現しない(例えば、/gu/ ‘CARRY’ という拘束語根は [gù:]ではなく [gu]となる[声調は前の音節のそれによる])。/V/タイプの類別接頭辞が長母音で実現するという事実は、音声的には類別接頭辞が自立的にみえるものの、それだけ類別接頭辞が形態論的に拘束語根と一体となっていることを示すと考えられる(詳細は、堀 2001bを参照)。

一方、閉音節構造の類別接頭辞には次のようなタイプがある。

#### (8) 類別接頭辞の音節構造：閉音節の場合

- a. CVC: (i) *cad-, c'əs-, jaʔ-, gab-*; (ii) *dəm-, jan-, kal-, Piw-*
- b. CV<sub>i</sub>V<sub>i</sub>C: *c'aam-, gaam-, maat-*
- c. C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>VC: (i) *ʔ'ab-, sdləd-, sgab-*; (ii) *sdaw-, ʔgam-, ʔk'un-, s'piw-*
- d. C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>i</sub>V<sub>i</sub>C: (i) *ʔgaam-, ʔ'aad-*; (ii) *q'waat-, xwaad-*
- e. C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>V<sub>i</sub>(V<sub>i</sub>)C: *snʔat-, ʔkyaad-*

<sup>9</sup> /V<sub>i</sub>V<sub>i</sub>/ は同一母音の連続を表わす。

<sup>10</sup> 但し、*dlə-*は [dɪl] のように音節主音的な側面接近音として実現する。

閉音節構造のうち、末尾の子音が阻害音（すなわち、閉鎖音、摩擦音）である(8a)の(i)と(8c)の(i)と(8e)の単母音音節は低声調を担い、それ以外はすべて高声調を担う。また、音節初頭に2つ以上の子音が現われる場合は、(8c)と(8d)の(i)に示されるように、C<sub>1</sub>に/s, t/のいずれか、C<sub>2</sub>に阻害音（上記の二種類の音に加えて側面破擦音の/dl, tl, tl'/を含む）が現われる組み合わせ（例：/sg/, /tg/, /sdl/）と、(8d)の(ii)のようにC<sub>1</sub>に閉鎖音、C<sub>2</sub>に/w/が現われる組み合わせ（例：/q'w/, /kw/）に限られるようである。

尚、/sʔ/ /snʔ/などの子音連続は、おそらく類別接頭辞に固有のものであり、他の形態素にはみられない。ことによると音象徴的な働きもあると考えられるが、類別接頭辞において形式と意味の間に一定の相関関係があるか否かは検討の余地がある(3.2も参照)。

### 3.2 意味的分類

ハイダ語の類別接頭辞はその数が多く、Swanton (1911)で36、Levine (1977)で34が数えられており、筆者の調査ではおよそ100種類以上、更に、Enrico (2005)では400種類を数える<sup>11</sup>。これだけの数の多さからみても名詞クラスとは異なり(Dixon 1986参照)、その点でいえば、ハイダ語の類別接頭辞（あるいは他の言語にみられる動詞類別辞）は助数詞に近いといえよう。

ハイダ語の類別接頭辞には、それによって分類される名詞がある程度決まっているもの（例えば、日本語の助数詞「本」に対する「人参」や「鉛筆」などと比較）と、そのような名詞が決まっていないものがある。後者の類別接頭辞は、その指示対象のその時々の状態や様態を表わすために用いられるという点で、いうなれば、典型的な類別とは異なる機能を有するといえる。ただ、前者のような場合でも、ある名詞に対する類別接頭辞の使用が固定されているわけではなく、あくまでも話者が発話においてその名詞のどの部分もしくは様態に重きを置くかによって使われる類別接頭辞が異なることがあり得る（例えば、(6b)、また、後述参照）。その点において、名詞とそれが属するクラスが固定されている名詞クラスと異なる。

ハイダ語の類別接頭辞の表わす範疇のうち、最も上位にあるのは[有生性]による区別である。そのうち、[+有生性]（すなわち有生物）を表わす類別接頭辞には *dlə-* と *gaŋ-* があり、前者は単数の有生物、後者は有生物の（複数という

<sup>11</sup> 但し、Enrico (2005)は過剰分析の可能性もあり、この数字には多少の疑問が残る。



よりも) 集団を表わす。但し、有生物といってもすべての有生物を包含するわけではなく、ほ乳類や魚、鳥が主であり、それ以外の有生物はその形状などの特徴によって他の類別接頭辞が用いられる(例: *naw* 'octopus' には長い突起物があるものを表わす類別接頭辞 *ji-* が適用される)<sup>12</sup>。次の(9a)は類別接頭辞が人に、また、(9b)は *taayi* 'coho salmon,' (9c)は *xuudaay* 'the harbour seal,' (9d)は *tadlə* 'loon' に対して用いられた例である(いずれも自動詞節である)。

- (9) a. *gandlaay=g*uud 'la **dlə**-xyaaj-daal-gən.  
 the.water=along he CL-RUN-along-PAST  
 'He ran along the river.'
- b. *qwaayaay=g*iisda='uu taayi **dlə**-xyaaj-gən.  
 the.ropе=from=FOC coho.salmon CL-HANG-PAST  
 'Coho salmon hanged down from the rope.'
- c. *hawxan='*uu xuudaay=?əsəŋ gay-**dlə**-giŋ-gən.  
 still=FOC the.harbour.seal=too by.floating-CL-FLOAT-PAST  
 'The harbour seal was still floating.'
- d. *tadlə='*uu *gandlə=g*ii **dlə**-gi-gwaaj-gən.  
 loon=FOC water=into CL-MOVE.ON.THE.WATER-around-PAST  
 'A loon was swimming around in the water.'

一方、有生物の集団に対して類別接頭辞 *gaŋ-* が用いられている例には次のようなものがある。

- (10) a. *q'a naay=g*ii t'aləŋ **gaŋ**-daal-c'i-gən.  
 the.hotel=into we CL-MOVE.ALONG-into-PAST  
 'We walked into the hotel.'
- b. *fk'yaanc'igaŋaay=g*a=?əsəŋ t'l'ə=sdiŋ **gaŋ**-xiŋ-daal-gən.  
 the.bushes=to=too two.of.them CL-RUN-along-PAST  
 'Two of them (= wolves) ran into the bushes again.'

<sup>12</sup> Enrico (2005: 905)によれば、*gaŋ-*は鳥や虫(但し、一部の動詞語根に限られる)にも用いられる。

尚、後述するように、人に対しては、これら二種類の類別接頭辞に加えて、何らかの意味を付与するために本来無生物に適用される類別接頭辞が用いられることがある。

一方、無生物は、まず1次元のもの（線状）、2次元のもの（平面）、3次元のもの（球体や構造体）に分けられ、更に、それぞれについて下位分類することができる。ひとまず、類別接頭辞の中でも、それによって分類される典型的な名詞が捕捉しやすいものを対象に、1次元のものを表わす類別接頭辞をあげてみると、おおよそ [flexible] か [rigid] によって大きく分けられ、更に、前者は [extended] によって端の有無、後者は円筒・円柱、曲がった物体といった形状によって分けることができる。その関係を示せば、次のようである（括弧内にあるのは、その範疇に属する代表的な名詞である）。

(11) 類別接頭辞の意味分類：1次元

a. [flexible]

(i) [+extended] *sga-* (rope, road); (ii) [-extended] *t'a-* (necklace, belt)

b. [rigid]

(i) [cylindrical]

[solid] large: *ʔgi-* (log, totem pole) / small *sq'a-* (stick, cane)

[hollow] *sk'a-* (bottle, riddle)

(ii) [curved] *sga-* (ring, bow)

2次元を表わす類別接頭辞は、ある形状を有するもの（円形・四角形・格子状など）と形状が特定できないものに分かれ、後者は、固さや拡がりによって細かく分けられる。すなわち、2次元のもののうち、形状が特定できないものは1次元のものと同じ特徴によって分類されるといえる。

(12) 類別接頭辞の意味分類：2次元

a. 形状があるもの

(i) [round/concave] *gu-* (button, mask); (ii) [rectangular] *gi-* (blanket, kerchief);

(iii) [grid-like] *ʔga-* (ladder, chair); (iv) [spatulate] *t'aw-* (feather, spoon); (v)

[branching] many projections: *ʔq'a-* (comb, branch), paired projections: *ʔga-* (scissors, fork); (vi) [radial] *ji-* (hand, glove)

b. 形状が特定できないもの

- (i) [rigid] *ga-* (board, dish, town); (ii) [flexible] *tl'ə-* (paper, saw, leaf); (iii) [extended] *q'a-* (earth, sky)

3次元のものに関わる類別接頭辞の場合は、類別される名詞の指示物の機能が意味特徴として加わる。

(13) 類別接頭辞の意味分類：3次元

- a. 形状 [spherical]: (i) small *skaa-* (berry, potato); (ii) large *q'ay-* (money, the sun, the moon)  
b. 機能 (i) [container, rigid] *c'əs-* (box); (ii) [container, flexible] *ci-* (bag, coat); (iii) [building] *tay-* (house)

(13) の3次元のものは、形状というよりもむしろ機能の面からみた分類が中心になっている。それはおそらく3次元になると、様々な形のものが現われ、それらについて一つ一つの範疇を立てるよりは、その物体の機能や用途によってまとめた方が簡便だからであろう。しかし、こうした機能の面からみた分類は、その文化固有の慣習に基づく範疇化の反映であるゆえに、形状による分類よりも部外者にとっては分かりにくいことが多く、また予測が難しい (Allan 1977: 290など参照)。更に言えば、機能によって立てられた範疇は、形状による範疇よりもそれに属する名詞が少ない傾向にある。実際、(13b) の *c'əs-* は箱の形状一般 (すなわち六面体) を表わすというよりも、箱として使用しうるものに限られるという点でかなり限定的である。また、*tay-* も建物にしか使えないので、その適用範囲はかなり狭いといえる。加えて、このように機能が基準の一つとして用いられるゆえに、分類がすべての名詞に及ばないとも考えられる (Aikhenvald 2000: 335)。

類別辞の意味分類は、これまで Adams and Conklin (1973), Allan (1977), Aikhenvald (2000) などいくつかの試みがなされてきた。勿論、対象とする類別辞が助数詞であるのか、動詞類別辞であるのかななどによって意味分類が異なることがあるものの、有生物と無生物の区別があること、無生物を細かく分けるには、形、大きさ、堅さ、材質などが関与していることが指摘されている。これらの特徴は、人の感覚 (視覚と触覚) で捉えられるゆえに、おそらくどの言語にも広く適用されるのであろう (参照: Adams and Conklin 1973: 298)。ま

た、これらの感覚に基づく類別辞は、部外者にとっても認識し、習得することが比較的容易であることが多い。

しかし、人間の感覚によって分類された名詞が常に何らかの特徴を共有し、それによって一つの範疇にまとめられるとは限らない (Aikhenvald 2000: 308)。そうしてまとめられた名詞も均質の範疇をなすわけではなく、それらの名詞を結びつける動機が分からない場合も多い。例えば、*sga-*という類別接頭辞は、「ロープ」や「道」など1次元のものを表わすが ((11a) 参照)、その中に例えば、*tada* 'year, winter' や *siŋ* 'day', *gaal* 'night' といった時間の単位まで含まれるのは、如何なる理由によるのかはつきりせず、たとえ分かったとしても、それに対する十分な証拠が得られない限り、それらの名詞が属する動機付けを説明したことにはならない。

しかし、見方をかえれば、一群の名詞を一つの範疇にまとめるその方法から、その文化の社会歴史的な背景が分かることもある。例えば、ハイダ語の *tlaw* 'boat, canoe' には、「ブランケット」や「ネッカチーフ」と同じく *gi-*という類別接頭辞 ((12a) 参照) が用いられるが、これは、ハイダ族のカヌーがかつて帆を張っていたからである (Enrico 2005: 932)。同様に、*sgaw* 'knife' に対して *ga-*という「板」や「皿」と同じ類別接頭辞 ((12b) 参照) が用いられるのは、ハイダ族はかつて貝殻をナイフとして使っていたからであり、それゆえに、「ナイフ」は、実際に現在使われている形状に拘わらず、平たいものの中に分類されていると考えられる。

更に、こうした分類のあり方から、その民族が新たに導入された手工品を受け入れる時に、そのどの特徴を分類に最も有効なものとして見做したかが分かる。ハイダ族の場合をみると、ヨーロッパ人との接触の後に導入されたものに対しては、その形状によって分類していることが多い。例えば、*jigu* 'gun' を「武器」の一種として捉え、*c'i't'aləŋpu* 'arrow', あるいは *tciid* 'bow' と同じ範疇に入れることも考えられるが、実際には、銃身の形が筒状であるところから *sk'a-*という類別接頭辞と結びつけられている<sup>13</sup>。同様に、その *jigu* 'gun' を構成要素に持つ複合語 *jigu+ŋgaay* (gun+stone) 'bullet' もその形状から、ベリーやジャガイモなど球状のものを表わす *skaa-*という類別接頭辞が用いられる。

上に示した分類は、もとより固定的なものではない。実際、同じ名詞が異な

<sup>13</sup> ちなみに、「矢」には *sq'a-*、「弓」には *sda-*という類別接頭辞が用いられる。いずれも形状による分類である。

る範疇に属することがある。例えば、*stləgyaa* ‘ring’ に対しては、*sda-*と*sga-*の両方の類別接頭辞が用いられ得る。いずれも輪状のものを表わすが、前者の類別接頭辞は円形、後者は円弧状のものを表わす傾向にある。同様に、*cutɬcacaanʔu* ‘chair’ は、類別接頭辞として*ɬga-*と*ʔga-*のいずれも用いられる（前者の類別接頭辞は、いわば格子状になっているもの、後者は、対になった突起物があるものに対して用いられる）。

類別接頭辞による分類（範疇）とそれに属するとみられる名詞が一对一の関係にないことも名詞クラスと異なる点である（更に後述参照）。

(11) から (13) に示した分類は、ハイダ語に現われるすべての類別接頭辞を対象としたものではなく、名詞との結びつきが分かりやすいものに限っているので、分類としては不十分である。また、分類の仕方、とりわけ意味特徴の間に、階層的な関係があるのかどうかなど、いくつか更に検討を重ねる余地がある。とりわけ3次元のものは、特定の名詞と結びつかない類別接頭辞を含めれば、更にいくつかの特徴が必要になってくることが十分予想される<sup>14</sup>。

Enrico (2005: 1857ff.) ではより多くの類別接頭辞を対象に意味特徴の指定の組み合わせ方によって類別接頭辞の記述を試みているが、対象を1次元と2次元だけに限定していること、また、意味特徴の設定が過剰に細分化されているために、結果として示される分類が如何なる体系をなすのかが分からなくなってしまっているのが問題点として指摘できる。そもそもひとつの範疇に属する名詞の間に共有する特徴を見出すことが難しいゆえに、そのようなtaxonomicな方法がハイダ語などの動詞類別辞を含む名詞類別一般を記述するのに有効かどうかとも検討する必要がある（尚、分類の方法論についてはAikhenvald 2000: 317も参照）。

尚、形式と意味の間の関連性を示唆するものとして、Levine (1977: 151) は、(14) に示すように、音節末尾が/b/で終わる類別接頭辞と/m/で終わるそれらの組をあげている（表記はLevine 1977のものを本稿のそれに改変した。尚、括弧に示したのはそれぞれの類別接頭辞の範疇の近似的な意味であり、必ずしも正確な意味ではない）。

<sup>14</sup> 実際、3次元には [spherical] しか設定していないが、例えば、六面体に対して用いられる *ɬa-* という類別接頭辞を記述するには (13) に立てた特徴以外に [hexahedral] という特徴を設定しなくてはならない。

- (14) a. t'ab- (straight) : t'am- (narrow)  
 b. dab- (small) : dəm- (big and round)  
 c. sgab- (curved) : sgam- (hemispherical)

Levineが指摘するような末尾子音が/b/と/m/である類別接頭辞の組は、他にもみられる。例えば、

- (15) a. gab- (flat and concave) : gəm- (small and flat)  
 b. k'ab- (tight) : k'əm- (small pieces)  
 c. tɔgab- (fast) : tɔgəm- (small spherical)  
 d. tl'ab- (thin) : tl'am- (tight)

Levine (1977: 151) は、/b/で終わる類別接頭辞は1次元の形状、/m/で終わるそれらは2次元の形状を表わすと指摘し、歴史的にこれらの子音は何らかの形態素的な機能を有していたと述べている。しかし、Levine (1977) があげる例のうち(14b)の組はいずれも2次元ないし3次元のものを表わし、また、(15)の組をみてもLevineのいうような意味的な相関関係があるとはいえない<sup>15</sup>。ただ、何らかの音象徴的な関係があったことは指摘できるかもしれないが、今はまだそれを詳らかにする機会を得ていない。

これと関連していえば、ハイダ語にはいわゆる擬音・擬態を表わす語がなく、類別接頭辞がそれに相当する働きをする。(16)に示すaのχuは空腹時に鳴る音あるいはいびき、bのgəmは小さくて平らなものに加えて、この場合は大きな音、cのq'aa-ははじけるような音（この場合は（赤ん坊の）大きな泣き声）、dのkaa-は甲高い笑い声を表わす。

- (16) a. dii dal q'ud-χu-daga-ga.  
 my stomach by.hunger-CL-MAKE.A.NOISE-NONPAST  
 'My stomach is rumbling.'  
 b. ?aŋk'us=iisda=χan 'lə=gəm-daga-sdlə-gən.  
 all.of.sudden he=CL-MAKE.A.NOISE-completely-PAST  
 'All of sudden he made a loud noise.'

<sup>15</sup> 詳述はここでは控えるが、これと似たようなことはすでにSapir (1923) も指摘している。

- c. huu      'lə=q'aa-ŋgɪŋəŋ=qawdi ...  
 then      he=CL-CRY=for.a.while  
 'Then he cried loudly and after a while ...'
- d. yaan      Beth      kaa-χatɕu-gən.  
 truly      Beth      CL-LAUGH-PAST  
 'Beth cackled.'

このような様々な音を表わす類別接頭辞が現われる動詞語根は、いずれも何らかの音を発することを意味するものに限られている（上掲の動詞語根の意味分類（5d）を参照）。一方、類別接頭辞をみると、物の形や大きさから転用されたものと、専ら音を表わすのに用いられるものがある。前者は、例えば、大きくて丸いものを表わす *dəm-* や幅広さを表わす *gəw-*、大きいものを表わす *kal-* が大きな音を表わし、また、薄くて幅の狭さを表わす *t'əm-* が高い音、小さいものを表わす *xə-* が小さい音、物が散らばった状態を表わす *jaa-* が不規則な音を表わすなど、おおよそ物の形や大きさとの間に類推関係を見出すことができる。それに対して、後者の専ら音を表わす類別接頭辞には、雷の音 *c'in-*、アビの鳴き声 *sq'aw-* などを表わすものがある<sup>16</sup>。

ところで、上に述べたように、名詞類別は、名詞クラスとは異なり、すべての名詞が何らかの範疇に属するようにはなっておらず、それらの範疇から漏れてしまうものが少なからずある。そうした場合、名詞類別を行なう多くの言語においては、どのような物に対しても広く適用できるような類別辞がある。例えば、ハイダ語の類別接頭辞 *?is-* は、無生物に対して広く用いられ、話者によっては本来使うべき類別接頭辞を使わずにこの *?is-* を多用することさえある。例えば、

- (17) a. ?anɕa      sgawaay      ʔaa      ?is-guy-da-gən.  
 own      the.knife      I      CL-FALL-CAUS-PAST  
 'I dropped my knife.'
- b. gyaa?adaay      ʔaa      ?is-guy-da-gən.  
 the.blanket      I      CL-FALL-CAUS-PAST  
 'I dropped the blanket.'

<sup>16</sup> 音象徴的な意味があるのかどうかをみるには、更に多くの類例を得る必要がある。

本来使われるべき類別接頭辞は、(17a) の *sgawaay* ‘the knife’ に対しては *ga-* (上述参照), (17b) の *gyaa?adaay* ‘the blanket’ に対しては四角いものを表わす *gi-* である。これらの類別接頭辞を用いずに適用範囲の広い *?is-* を用いることは、類別接頭辞が類別の機能を果たしていないことの現われともいえるが、動詞語根 *guy* は類別接頭辞を要求する拘束語根であるために、このような適用範囲の広い類別接頭辞があることによってその動詞語根を用いた表現が可能になっているともいえる。このような類別接頭辞の存在は、名詞類別のシステムを支えるのに必須であるといってもよいであろう<sup>17</sup>。

しかし、適用範囲の広い類別接頭辞 *?is-* を用いる話者であっても、本来使うべき適切な類別接頭辞があることは知っており、むしろ、そのような個別の類別接頭辞を用いることがより適切であると判断する。この事実は、類別接頭辞が意味を有するか否か、すなわち、話者は、類別辞の意味を内省によって分析し、どの名詞がどの範疇に属するかを把握しているか否かという問題 (Allan 1977: 290) とも関連する。ハイダ語に限っていえば、類別接頭辞の意味は、話者にとっても捕捉しやすく、実際、話者は、類別接頭辞だけを取り出して、それがどのような意味範囲の名詞に対して用いられるのか、内省によって確かめることができる。更に、一部の類別接頭辞は、拘束語根 *juu* に付加されて状態や性質を表わす動詞を作る。例えば、

- (18) a. *huusii='uu*    *c'əs-juu-ga*.  
           that=FOC        CL-ROOT-NONPAST  
           ‘That is a box-like thing.’
- b. *huusii='uu*    *ci-juu-ga*.  
           that=FOC        CL-ROOT-NONPAST  
           ‘That is a bag-like thing.’
- c. *huusii='uu*    *sq'a-juu-ga*.  
           that=FOC        CL-ROOT-NONPAST  
           ‘That is a stick-like thing.’

これらの例における動詞語根 *juu* は、それ自身、具体的な意味を持っておら

<sup>17</sup> この類別接頭辞 *?is-* がどの程度適用されるかは十分調べているわけではないが、筆者の調査した範囲でいえば、有生物以外のかかなり多くの無生物に使われるようである。



ず、状態や性質を表わす語を作るための語根という働きしかない。そして、この場合、全体の具体的な意味を担っているのは、専ら類別接頭辞であり、このことから、類別接頭辞は具体的な意味を有するといえるであろう。

#### 4. ハイダ語の類別接頭辞の談話上の機能

先に述べたように、一つの名詞は必ず一つの範疇に固定的に属するわけではない。換言すれば、名詞と類別接頭辞の間は固定した結びつきではなく、一つの名詞が異なった類別接頭辞と結びつくことがあることから、類別接頭辞による範疇化は可変的であり、ある程度の変異を許すものである。以下、その事実を示す例をいくつか取り上げ、ハイダ語の類別接頭辞が談話において果たす機能、更には、類別接頭辞の本質的な機能について考察する。

##### [1] 名詞の表わす指示物を細分化する機能

例えば、ハイダ語の名詞 *qugin* は、「紙」だけでなく、「本」などの紙のできたもの全般を表わす。「紙」を表わすか、「本」を表わすかは、文脈から区別できることが多いであろうが、しかし、次の文のように類別接頭辞が異なることによって、そのいずれを表わすかが明確になることがある。

- (19) a. *quginaay* 'laa tɬ'ə-xiidən.  
       the.paper he/she CL-PICK.UP[PAST]  
       'He picked up the paper.'
- b. *quginaay* 'laa q'ay-xiidən.  
       the.paper he/she CL-PICK.UP[PAST]  
       'He picked up the book.'

(19a) では薄いものを表わす類別接頭辞 *tɬ'ə*、(19b) では丸いもの、あるいは、大きな塊を表わす類別接頭辞 *q'ay* がそれぞれ用いられていることによって、それらの他動詞節の目的語の意味が差異化され、具体的に「紙」を表わすのか、それとも「本」を表わすのかが明確になっている。つまり、名詞 *qugin* はいわば「紙」という材質以外の詳細な情報を表わすわけではなく、類別接頭辞は、そうした抽象的な意味をより個別化する、すなわち、紙という材質でできている物か本であるかをより細かく表わす機能を有するとみることができる。

次の例においても (19) と同じ類別接頭辞の組によって、目的語となる名詞 *daalə* ‘money’ が紙幣なのか (20a)、それとも硬貨なのか (20b) がより具体的に表わされる。

- (20) a. *daaləgaay*     $\text{tə=tl'ə-guy-da-gən}$ .  
           the.money    I=CL-FALL-CAUS-PAST  
           ‘I dropped the bill.’
- b. *daaləgaay*     $\text{tə=q'ay-guy-da-gən}$ .  
           the.money    I=CL-FALL-CAUS-PAST  
           ‘I dropped the coin.’

あるいは、*tgaagaay* ‘the stone’ という名詞には、形や大きさに関する意味特徴が含まれないが、同じ節に現われる動詞に付加される類別接頭辞によって、その「石」の形状が表わされることがある。例えば、

- (21) a. *tgaagaay*     $\text{tə=skaa-guy-da-gən}$ .  
           the.stone    I=CL-FALL-CAUS-PAST  
           ‘I dropped the (ball-like) stone.’
- b. *tgaagaay*     $\text{tə=gu-guy-da-gən}$ .  
           the.stone    I=CL-FALL-CAUS-PAST  
           ‘I dropped the (button-like) stone.’

(21a) の小さい球状のものを表わす類別接頭辞 *skaa-*、また、(21b) のボタンのように平たくて凹型のものを表わす類別接頭辞 *gu-* がそれぞれ目的語となる *tgaagaay* ‘the stone’ の形状を具体的に指定する機能を果たしている。これらの例において、名詞そのものには修飾語句が付かず、専ら動詞に付加された類別接頭辞が動詞の側から名詞を修飾している点が特徴的である。

## [2] 名詞で表わされる指示対象の状態を表わす。

ハイダ語の類別接頭辞は、それと統語的に結びつく名詞の一時的あるいは恒常的な状態を表わすことがある。例えば、次の (22) における *ciina* ‘fish’ は、本来であれば (22a) のように有生物を表わす類別接頭辞 *dlə-* が用いられるべきであるが、(22b) では「平たくて堅いもの」を表わす *ga-* が用いられている。後

者の類別接頭辞は、すなわち、その「魚」が生きた状態ではなく、切り身に（なり、調理）された状態にあることを示している。

- (22) a. *ciina=ʔəsəŋ*      *dla-ʔən-gən.*  
 fish=too              CL-BE-PAST  
 'Fish lay down (on it) too.'
- b. *ciina=ʔəsəŋ*      *ga-ʔən-gən.*  
 fish=too              CL-BE-PAST  
 '(A fillet of) fish was (on it) too.'

同様に、次の例（自動詞節）も、その主語 *ci'iisgu* 'coat' に対して本来用いるべき類別接頭辞 *ci-*とは違った類別接頭辞 *gəw-*を適用することによって、その名詞で表わされる指示物が通常のものとは違うことを表わしている。

- (23) a. *'laaga*    *ci'iisgu*    *gawdla*    *gay-ci-giŋ-gən.*  
 her        coat        new        by.floating-CL-FLOAT-PAST  
 'Her new coat was floating.'
- b. *'laaga*    *ci'iisgu*    *gawdla*    *gay-gəw-giŋ-gən.*  
 her        coat        new        by.floating-CL-FLOAT-PAST  
 'Her new (and big) coat was floating.'

(23a)は、「コートが浮いている」という出来事を表わすのに最も中立的な表現であるが、(23b)では幅の広いもの（例えば、「川」「大皿」「洗い桶」など）に適用される *gəw-*という類別接頭辞が用いられることによって、その「コート」が通常よりも大きいサイズのものであることが含意される。ここでも名詞に修飾語を加えるのではなく、類別接頭辞が修飾の機能を果たしていることに注意されたい。

これと同種の類別接頭辞の用法として、名詞で表わされた指示物が容器などに入れられた状態を表わすことがある。例えば、

- (24) a. *sgəwsidaay*      *c'əs-gudi-ga.*  
 the.potatoes      CL-LIE-NONPAST  
 'There is a box of potatoes.' (lit. The potatoes in a box lie.)

- b. *sgəwsidaay*      *ci-gudi-ga*  
 the.potatoes      CL-LIE-NONPAST  
 'There is a bag of potatoes.' (lit. The potatoes in a bag lie.)

(24) の主語となる名詞 *sgəwsidaay* 'the potato' に本来適用される類別接頭辞は、小さい球状のものを表わす *skaa-* であるが、(24a) では箱状のものを表わす類別接頭辞 *c'əs-*、(24b) では袋状のものを表わす *ci-* が用いられることによって、その「ジャガイモ」がそれらの容器に入っていることが表わされている。ハイダ語においてもその物が入っている場所を後置詞句で表わすことができるが（英語の *in a box* などと比較）、これらの例においては、動詞の側で「ジャガイモ」の一時的な状態が表わされているといえる。更にいえば、この場合、「ジャガイモ」そのものよりも「ジャガイモ」が入っている容器に対する類別接頭辞が使われていることは、メトニミー的な使用ともみることができる<sup>18</sup>。

前節において、類別接頭辞の中には、ある一定の名詞と結びつくことが予測できる（すなわち、範疇が分かりやすい）ものと、名詞との結びつきが見定めがたいものがあると述べたが、指示対象の状態を表わす類別接頭辞は、後者のものに多い。

次の (25) における類別接頭辞は、それぞれ動作の状態を表わす。

- (25) a. *dəŋ*      *sk'yaaji*      *ʔk'un-giləŋ-ga*.  
 your      eyebrows      CL-BE.IN.CL.TYPE-NONPAST  
 'You have thick eyebrows.' (lit. Your eyebrows are bushy.)
- b. *gina*      *ʔə=xud-sq'aa-tl'ə-gəŋ-giini*.  
 something      I=by.drinking-CL-TAKE-HABIT-PAST  
 'I used to have a little drink.'
- c. *gaŋaa=χan='uu*      *c'it'aləŋʔwaay*      *xab-ʔə-gəŋ*.  
 soon      the.arrow      CL-MOVE-PAST  
 'Soon the arrow went fast'.

(25a) の類別接頭辞 *ʔk'un-* は動詞語根 *giləŋ* に付加され、全体として「眉毛」が

<sup>18</sup> ナバホ語の類別辞にも、袋に入った釘を示すのに、釘に対して用いられる類別辞ではなく、袋に対するそれを用いる用法がある (Landar 1965)。尚、Aikhenvald (2000: 296) も参照。

至る方向に向かって生えている状態を表わす。また、(25b)の類別接頭辞 *sq'aa-* は、動詞語根 *l'ə* が表わす「撰取する」行為がごく少量でなされることを表わす。(25c)は、放たれた「矢」がどのようにして移動したのかが類別接頭辞 *xab-* によって表わされている。これらの例における類別接頭辞は、特定の名詞と結びつくわけではなく、例えば、(25c)の類別接頭辞 *xab-* は、その節の主語 *c'it'aləŋ?waay* 'the arrow' がどのような範疇に属するかを示すものではない(「矢」に対する本来的な類別接頭辞は *sq'a-* である)。

更に、このような類別接頭辞が状態変化を含意する他動詞(2項動詞)に現われた場合、類別接頭辞は、行為の結果、その対象物(=目的語)がどのような状態になったかを表わす。例えば、

- (26) a. *gudʔgagaŋ?waay=gii* 'la *gud-k'əm-ʔə-gən.*  
 the.chair=into he by.sitting-CL-BREAK-PAST  
 'He broke the chair into pieces by sitting.'
- b. *sdal q'ul=gi* Tim *musəmuus jid-q'ab-sgiidən.*  
 cliff base=to Tim cow by.shooting-CL-CONTACT[PAST]  
 'Tim shot a cow at the bottom of the cliff.'
- c. *taaŋaay* 'la *ʔci-ʔiw-χəl-gən.*  
 the.sand he by.digging-CL-HAVE.A.HOLE-PAST  
 'He dug a big hole in the sand.'

(26a)の粉々の状態になったものを表わす類別接頭辞 *k'əm-* は、この場合、「座って壊した」結果、「椅子」がバラバラになった状態を表わしている。また、(26b)の類別接頭辞 *q'ab-* は、人などがうつぶせになった、あるいは、腹ばいになった状態を表わすが、この場合は、「牛」を「銃で撃った」結果、その「牛」がそういった状態にあることを示している。更に(26c)では、「掘ることによって」空けられた穴の大きさが類別接頭辞 *ʔiw-* によって表わされている。

このような類別接頭辞の本来の機能とは異なる用法は、物だけでなく人に適用される場合にもみられる。

- (27) a. *gina=χandi* Ø *sgab-jiguləŋ-gən.*  
 something=because.of (people) CL-WALK.AROUND[PL]-PAST  
 'Because of this, people stooped (with old age) walked around.'

b. waaj=xuy=tl'aa='uu                      dii    nana-gu-giidən.  
 toward.the.other.side=but=FOC    I    by.staggering-CL-MOVE.FAST[PAST]  
 'But I, hunchbacked, staggered toward the other side.'

c. 'lə=st'i+ʔal-gudi-ga.  
 he=sick+CL-LIE-NONPAST  
 'He, pitiful, is lying sick.' (Enrico 2005: 1646)

(27a) と (27b) の類別接頭辞は、本来、無生物に対して用いられ、それぞれ「曲がった物」「平たくくぼんだ物」の範疇に属することを表わすが、この場合は、人に適用されて、いずれも背中が曲がった状態にある人を表わす。また、(27c) の類別接頭辞は、親愛の情を表わすものである。中立的な表現であれば、(27a) は語根 *jiculəŋ* が複数の主語に対して用いられるので類別接頭辞に *gaŋ-*、一方、(27b) と (27c) は *dlə-* が現われる。尚、名詞類別を行なう言語の中には、社会的地位を表わす類別辞があるが、ハイダ語にはない。

これらの例における類別接頭辞は、いずれも自動詞節の主語あるいは他動詞節の目的語となる名詞と本来的に結びつくものではなく、従って、それらの名詞の意味範疇を示すという本来の類別接頭辞の機能とは異なる働きをすることができる。こうした類別接頭辞の用法が可能なのは、結局、話者が実際の発話の中に現われる事物 (= 名詞) に対して、最も顕著なもの、あるいは、卓立させるべき特徴を文脈に応じて選ぶことができる自由度があるからであろう。もしそのような表現上の手段が不要であれば、中立的な類別接頭辞を選択すればよく、更には、類別接頭辞が付加され得ない自由語根によって同じような出来事を表現することもできる。例えば、次にあげるのは、類似する出来事をそれぞれ自由語根 (各組の a) と拘束語根 (各組の b) で表わした例である。

(28) a. hawiid=χan    'laa    gə                      taa-gən.  
 in.a.hurry        3        something        eat-PAST  
 'He ate something in a hurry.'

b. 'laa    gə                      ʔgab-gaac'i-gən.  
 3        something        CL-EAT-PAST  
 'He ate something fast.'

(29) a. tə=qaa-guŋ-gən.

I=walk-around-PAST

'I walked around.'

b. gina=χandi                      Ø                      sgab-jiguləŋ-gən.

something=because.of      (people)      CL-WALK.AROUND-PAST

'Because of this, people stooped (with old age) walked around.' = (27a)

これらの類別接頭辞は、これまでみてきた例と同様、それらの他動詞節の目的語 ((28b) の *gə* 'something') や自動詞節の主語 ((29b) の Ø (この場合は文脈から 'people') となる名詞句が表わす指示物の意味範疇を表わすわけではない。むしろ、(28b) の類別接頭辞 *tgab* は「食べる」という行為の行なわれる様子を表わす ((29b) は上掲の (27a) を参照)。各組の拘束語根を用いた例と同じ出来事を自由語根で表わすとすれば、(28a) は *hawiid=χan* 'in a hurry' のような副詞 (句)、また、(29a) であれば *sgabjuu* 'bent' を修飾語 (句) として加える必要がある (拘束語根の *juu* については3.2を参照)。そのいずれの表現によっても文法的には適っているが、両者の間には文脈の中での適不適の差があろうし、また、動詞に情報を集中させる傾向にあるハイダ語では、むしろ拘束語根を用いた各組のbのような表現が好まれると予想される。

このことは、例えば、次に示す、談話から抜き出した発話でもみてとることができる。(30) は、*dii cinga* 'my grandfather' が家の前で椅子に座った状態で (= (30 [1])), 口笛を吹きながら足でリズムをとっているうちに、椅子をバラバラに壊してしまい (= (30 [2])), その物音を聞いた語り手が見に行ってみたところ、椅子がバラバラになった状態で地面に散乱していた (= (30 [3])) という一連の出来事を描写したものである (但し、実際には、[1] から [3] の文は一続きになっているわけではなく、それらの間に他の文が入っている)。

(30) [1] *dii cinga=ʔəʂəŋ naagaay χaŋ=gu gudʔgagaanʔu=gu q'əw-ʔu-gən.*

my grandfather=too the.house in.front.of chair=on sit-SG-PAST

'My grandfather was sitting in front of the house.'

[2] *gii='uu gudʔgagaanʔwaay=gii 'la gud-k'əm-tə-gən.*

then the.chair=into he by.sitting-CL-BREAK-PAST

'He broke the chair into pieces by sitting.' = (26a)

[3] gudʔgagaŋʔwaay tɕaay=gu jaʔ-gudi-gən.  
 the.chair the.ground=on CL-LIE-PAST  
 ‘The (parts of the) chair piled up in a mess.’

(30 [3]) の類別接頭辞 *jaʔ-* は小さな物体が散乱した状態を表わすが、それを拘束語根 *gudi* を用いた述語の「中」ではなく、次の (31) のように「外」に出して表わすことも可能である。

(31) a. gudʔgagaŋʔwaay jaʔ-juu-s tɕaay=gu tɕa-gudi-gən.  
 the.chair CL-ROOT-NONPAST the.ground=on CL-LIE-PAST  
 b. gudʔgagaŋʔwaay jaʔ-juu-s tɕaay=gu ʔiijin.  
 the.chair CL-ROOT-NONPAST the.ground=on be[PAST]

いずれも *jaʔ-juu* ‘be messy’ という修飾語を名詞 ‘the chair’ に加えた表現であるが、これらの文は、その椅子がどのような状態で存在しているのかを表わすのではなく、どのような状態の椅子が存在するのかを表わしており、おそらくこの文脈には適合しないと考えられる。つまり、この文脈において、その椅子の状態に関する新しい情報は、名詞に加えられる修飾語ではなく、動詞の中の類別接頭辞に担わせる方がより相応しいとみられる。おそらく類別接頭辞を用いた表現、あるいは、(28) (29) でみたような拘束語根と自由語根のいずれによって述語を組み立てるかは、こうした談話上の情報構造とも関連してくるとひとまず考えられよう。

更に、情報構造との関連でいえば、類別接頭辞には、他動詞の目的語が明示されなくてもその指示対象を表わす機能がある。例えば、

(32) naah=xi=ʔuu Ø ʔlaa ga-sdlə-cʔaŋ.  
 inside=to=FOC (it) 3 CL-MOVE-into[PR]  
 ‘He carried (it) inside. (Wilson 1972)’

この文の目的語となる名詞句は明示されていないが、用いられている類別接頭辞 *ga-* によって何か平たいもの、あるいは、平たい容器に入ったものを運ぶことが表わされる<sup>19</sup>。すなわち、名詞が明示されていなくても、類別接頭辞がその

<sup>19</sup> この例は翻訳応答形式によって得られたものであり、実際の文脈がない文であるが、話者が目的



存在を示すとともに、その指示物が何であるかを具体的に表わす働きをしているといえる。談話上においては、この類別接頭辞があるゆえに、何が省略されているかが分かる仕組みになっており、類別接頭辞が情報構造において一定の役割を果たすことがこの例からも窺える。

## 5. 名詞類別と類別接頭辞の機能

3.2で述べたように、ハイダ語の類別接頭辞の機能のうち、統語的に関わる名詞の意味範疇を示すという名詞類別の観点について述べると、ハイダ語に限らず、名詞類別を行なう言語における類別辞を普遍的な意味のパラメーターによって記述できるか否かという問題がある。おそらく人間が認知しやすいのは視覚に訴える特徴であろうから、例えば、形状や有生性に基づく分類は多くの言語で認められ (Allan 1977, Aikhenvald 2000 など)、また、外部者にとっても捕捉しやすい。しかし、形状を記述するためのパラメーター (例えば、[dimensional] [extendedness] [direction] など。Aikhenvald 2000 を参照) をみても、それらのうち、どれが関与的なのか、あるいは、それらがどのように組み合わさって名詞類別の体系をなしているのかは、言語によって区々であり、一見したところ、そこに普遍性を求めることはおそらく難しい。そもそもそうしたパラメーターがその言語の名詞類別のあり方そのものを捉えるのに妥当なのかどうかという点も検討すべきであろう。

これまでみてきたように、統語的に関わる名詞 (自動詞節では主語、他動詞節では目的語) が属する意味範疇を示すというのがハイダ語の類別接頭辞にみられる典型的な類別の機能であると考えられる。しかし、類別接頭辞で示されるその範疇は決して固定的ではない。実際、一つの名詞がその使われる文脈によって異なった範疇に属することがあるのは、その範疇に「可変性」があることの現われである。話者は、ある物体を捉える際に、様々ある特徴のうちで最も顕著なものをその都度選び出し、類別接頭辞と結びつけているのであり、それは類別接頭辞の範疇に可変性があるから可能なのである。4節でみた名詞のその時の状態を表わす類別接頭辞の機能 (上掲の (30) など) は、そうした範疇の「可変性」の延長線上にあるものとみることができよう。

このような類別接頭辞の機能は、本質的には、名詞を「個別化」することに

---

語として例示していたのは、'a panful of berries' であった。

あると考えられる (Denny 1986, Craig 1994を参照)。すなわち、名詞が表わす事物に対して文脈に沿った情報を加えることによって限定し、その名詞により具体性を与えるのが類別接頭辞であると考えられる。しかし、言語相対論の観点からみると、言語外現実にある様々な事物の捉え方が個々の言語に固有のものであるとするならば、それを個別化する機能を担う類別接頭辞 (より一般的に言えば類別辞) もその言語固有の原理によっていることになる<sup>20</sup>。このように考えれば、類別辞を記述する意味的なパラメーターにどの程度の普遍性があるのか、検討の余地が多く残されていると言わざるを得ない。

### 略号一覧

CAUS: causative, CL: classifier, FOC: focus, HABIT: habitual, IMP: imperative, NMLZ: nominalizer, PR: present. -: affix, +: compounding, =: clitic.

### 参考文献

- Adams, Karen L. and Nancy Fairs Conklin. 1973. Toward a theory of natural classification. Claudia Corum, T. Cedric Smith-Stark, Ann Weiser (eds.), *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 9: 1-10.
- Aikhenvald, Alexandra. 2000. *Classifiers: A typology of noun categorization devices*. Oxford: Oxford University Press.
- Allan, Keith. 1977. Classifiers. *Language* 53 (2): 285-311.
- Craig, Colette G. 1994. Classifiers in a functional perspective. In: Michael Fortescue, Peter Harder, Lars Kristoffersen (eds.), *Layered structure and reference in a functional perspective: Papers from the Functional Grammar Conference in Copenhagen 1990*: 277-301. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- (ed.) 1986. *Noun classes and categorization: Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification, Eugene, Oregon, October 1983*. Am-

<sup>20</sup> 尚、名詞と類別辞がそれぞれ果たす指示機能の違いについてDenny (1976: 125) は “nouns have more to do with what is out there in the world, and classifiers more to do with how humans interact with the world.” と述べているが、その “the world” が普遍的なそれとしてなのか、言語固有のそれ (Sapir 1929を参照) なのかによってその主張の捉え方はまた異なってくるであろう。

- sterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Croft, William. 1994. Semantic universals in classifier systems. *Word* 45 (2): 145–71.
- Davidson, William, L. W. Elford, and Harry Hoijer. 1963. Athapaskan classificatory verbs. In: Harry Hoijer, et al. *Studies in the Athapaskan languages* (University of California Publications in Linguistics, Vol. 29): 30–41. Berkeley: University of California Press.
- Denny, J. Peter. 1976. What are noun classifiers good for? In: Salikoko S. Mufwene, Carol A. Walker, Sanford B. Steever (eds.), *Papers from the Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 12: 122–32.
- . 1986. The semantic role of noun classifiers. In: Craig (ed.): 297–308.
- Dixon, R. M. W. 1982. *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.
- . 1986. Noun classes and noun categorization in typological perspective. In: Craig (ed.): 105–12.
- Enrico, John. 2005. *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks: Alaska Native Language Center/Sealaska Heritage Institute.
- 堀 博文 2001a. 「ハイダ語の類別接頭辞について」, 津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』第7号: 35–50 (文部省特定領域研究 (A)「環太平洋の『消滅に瀕した言語』」にかんする緊急調査研究」成果報告書A2-002) 大阪学院大学情報学部
- . 2001b. 「ハイダ語 (北米インディアン諸語) の声調について」, 『音声研究』第5巻第1号: 28–36, 日本音声学会
- Hori, Hirofumi. 2016. “Polysynthesis” in Haida. In: Kurebito, Tokusu (ed.), *Linguistic Typology of the North*, Vol. 3: 23–58. Research Institute for Language and Culture, Tokyo University of Foreign Studies.
- Landar, Herbert. 1965. Class co-occurrence in Navaho gender. *International Journal of American Linguistics* 31 (4): 326–31.
- Levine, Robert D. 1977. *The Skidegate dialect of Haida*. Ph. D. dissertation, Columbia University.
- Sapir, Edward. 1923. The phonetics of Haida. *International Journal of American Linguistics* 2: 143–58. Reprinted in: Edward Sapir 1991, *The collected works of Edward Sapir, Vol. VI: American Indian languages 2*: 151–67, edited by

Victor Golla. Berlin: Mouton de Gruyter.

-----, 1929. The status of linguistics as a science. *Language* 5: 207–14. Reprinted in: David G. Mandelbaum (ed.) 1949, *Selected writings of Edward Sapir in language, culture, and personality*: 160–6. Berkeley: University of California Press.

Swanton, John R. 1911. Haida. In: Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian languages, Part 1* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 40): 205–82. Washington, D. C.: Government Printing Office.

Wilson, Solomon. 1972. Audio tapes of Skidegate Haida Word Lists by Solomon Wilson and Jeff Leer. Downloaded from Alaska Native Language Archive, University of Alaska Fairbanks. (<https://www.uaf.edu/anla/>)

\* 本稿のハイダ語の資料は、次の方々から、直接的に、または、間接的に得たものである（イニシャル、生（没）年、性別のみを記す）。GC (1911–2001, m), JC (1924, f), BH (1928, f), DM (1929, f), NP (1926–2012, m), RJ (1924, m), ER (1921–2010, f), EW (1913–2009, m), JW (1921–2008, m), SW (1887–1980, m), AY (1924–2002, f), JY (1923–2008, m)。Dii gi tllgiidan sgawdagi dallng ga hll kil'laaga. Haw'a!

\* 本稿は、科学研究費（基盤研究（C））「ハイダ語の形態統語法と構造的変化に関する総合的研究」（研究代表者：堀 博文，課題番号：16K02663）による研究成果の一部である。